

山椒魚

映画文学人生論

井伏鱒二 (1923-90)

『幽閉』 (1923) 「世紀」

『幽閉 (山椒魚) 』 (1926) 「新潮社」

『山椒魚一童話一』 (1929) 「文芸都市」

『山椒魚』 (1930) (新興芸術派叢書) 新潮社」

『山椒魚』 (井伏鱒二自選全集) (1985) [新潮社]

山椒魚は悲しんだ。「なんたる失策であることか！」

山椒魚は悲しんだ。彼は彼の棲家（すみか）である池の岩屋でぼんやりしているところを中学生の井伏少年に見つかり、『幽閉』という習作のモデルにされてしまった。

「なんたる失策であることか！」

その後、『幽閉』は『山椒魚―童話―』として同人誌に発表された。童話と断つてあればまだ許せる。あらたに蛙を登場させ、山椒魚と蛙とを対話させたことによつて童話らしくなっている。これなら誰も事実とは思わない。

岩屋に閉じ込められたために、よくない性質を帯びて来た山椒魚は、或る日、岩屋の窓からまぎれ込んだ一ぴきの蛙を外に出ることができないようになった。蛙を自分と同じ状態に置くことができないのが痛快であったのだ。「一生涯ここに閉じ込めてやる！」。

一年の月日が過ぎ、更に一年の月日が過ぎた。二個の鉱物は、再び二個の生物に変化した。けれど彼等は、今年の夏はお互い黙り込んで、そしてお互いに自分の嘆息が相手に聞こえないように注意してゐたのである。

ところが、山椒魚よりも先に、岩の凹みにいる蛙は深い溜息をもらしてしまった。それは「ああああ」という最も小さな風の音であった。山椒魚がこれを聞きのがす道理はない。彼は上の方を見



山椒魚

映画文学人生論

上げ、かつ友情を瞳にこめてたずねた。

「お前は、さつき大きな息をしたろう？」

「それがどうした？」

「そんな返辞をするな。もう、そこから降りて

来てもよろしい」

「空腹で動けない」

「それでは、もう駄目なようか？」

相手は答えた。

「もう駄目なようだ」

よほど暫（しばらく）くして山椒魚はたずねた。

「お前は今どういうことを考えているようなの

だろうか？」

相手は極めて遠慮がちに答えた。

「今でもべつにお前のことをおこつてはいない

んだ」

山椒魚と蛙——いがみあっていた両生類同志の和解という童話の結末は悪くない。しかし、井伏はその後、なぜかタイトルから「童話」をはずした。さらに八十七歳の老人になってから、前掲の結末の部分をばっさり削除してしまった。

推敲を重ねて、芸術作品を完成させようとする文学者の良心によるものか。戦争をやめようとしていない人類の未来に絶望したからか。それとも単なるボケか。いずれにしても、山椒魚は悲しい。

百年もただにいちにち山椒魚

加藤かけい